

## 茜雲

手すりを頼りに二階に上って来た祖母タツが、無言で手招きをした。襖を開け放って待っていた佳代枝と弟淳一はそっと立ち上がって祖母の後に従った。

九州第二の長河、川内川のやや下流に位置する宮之城の濱崎医院は、玄関も窓も白いカーテンに覆われていた。奥の座敷には佳代枝の父濱崎政之が横たわり、母登紀子と祖父謙之介が両脇に座っていた。タツは登紀子から受け取った抹茶茶碗の中から水に浸された脱脂綿を割り箸でつまんで息子の口を湿すと、佳代枝に手渡した。佳代枝も淳一も祖母に倣った。

五ヶ月前、足を引きずるようにしてたどり着いた父であった。既に終戦後八ヶ月が経過していた。フィリピンの南の島で終戦を迎え、極端な飢えからは一応開放されて戻ったようだったが、侵された体はついに回復しなかったのだ。染込んだように日焼けした顔は深い皺が刻まれ、これがまだ四十歳台の顔とは到底思えない。見開いた眼はうつろであったが、佳代枝は父がかすかに自分を認識してくれたと思った。

「ああ、目を落とされた」

と後に控えていた看護婦が言った。登紀子の控えめな嗚咽が深く一同の胸を刺した。

佳代枝の記憶に残っている父は、体格のよい闊達な人であった。淳一はよく肩車に乗せてもらっていたが、佳代枝は女の子だからと言って「高い、高い」と言いながら精一杯高く持ち上げて周囲を巡ってくれたものだった。日曜日など昼食が済むと

「ああ、ウマカッタ。ウシマケタ」

と言っては皆を笑わせた。その政之の楽しげな哄笑は佳代枝の耳にずっと長く残っていた。

当時、政之は中堅の出版社勤務で、一家は世田谷の住宅地に住んでいた。幹部候補生だった政之は太平洋戦争の勃発直前に召集令状が来て、故郷に暇を告げる間もなく秘めやかに中国に出征して行った。妻登紀子は東京出身だったので、二年ほどは子供と留守を守っていた。しかし戦争は一向に終る気配のない上に徐々に物資が不足して来たところへ、政之の父謙之介からの要請もあったので、はるばる鹿児島に疎開することにしたのだった。昭和十八年、佳代枝は国民学校四年生、淳一は入学という春であった。

謙之介の濱崎病院は、宮之城駅の近くにあった。家庭医として地元で信頼の厚い謙之介のおかげで、母子は言葉を正確に理解出来なくても、さして周囲に疎外されることもなく、淡々とした日を送ることが出来た。

佳代枝が六年生の夏、終戦を迎えた。川内川河口の川内市は、空爆に逢って市の殆どが丸焼けになっていた。八月に入って山の中にある宮之城でさえ空爆を三回経験していた。淳一が友人たちと川内川で水遊びをしていたとき、機銃掃射を受けたのが最初だった。子供たちは銀翼の飛行機を日本軍と思い手を振っていたが、思いがけない銃撃に一齐に草むらに駆け込んで伏せた。焼夷弾が命中して五百メートルほど先の生糸の倉庫が炎上した。

物資は不足して、食料難は山の中の小都市にもかかわらず、農家でない配給に頼っている一般家庭を大いに悩ませた。それでもその時代の宮之城はまだ平穏と言えたのかも知れない。鹿児島市や川内市は殆ど灰燼に帰していた

のだったから。

前年昭和十九年の秋、南京にいた政之から南方に移動するという便りがあったが、その後はぷつぷつと音信が途絶えたまま終戦を迎えていた。家族は復員の情報に鋭く耳を済ませる日々となった。

混乱したその年も明けて、山々が萌えそめた若葉のさまざまな色に彩られ、まさに山笑うという表現が言い当てている頃、佳代枝は川内の女学校に入学した。女学校の校舎は焼け落ちていたので、焼け残った近くの小学校の校舎を借りて、低学年の生徒が帰ったあとを女学校が借りて、低い二人用の机に肩を触れ合わせて座っての授業だった。しかし小学校の三十人に一人の難関の県立女学校を突破したのだという彼女たちの誇りが、焼け野が原の街の授業のみすばらしさを感じさせることなく夢を育ませていた。宮之城線の無蓋の貨車で煙を浴びての通学さえも、上級生の語る、登校の途中に米軍の飛行機から浴びせられた機銃掃射の恐怖からすっかり開放された安堵感もあって、気にならなかった、というよりむしろ楽しんでいたとも言えた。

国破れて山河あり 城春にして草木深し

佳代枝は、大好きな川内川の悠久の流れに沿って走る列車の中で、無残なままの姿の街に比して、日々蘇る自然を眺め感傷的になった。

ある日、帰宅した佳代枝は玄関に大きな軍靴があるのを見て奥に駆け込んだ。開け放された仏間には正座して仏壇に頭を下げている痩せた父がいた。ああこれで濱崎家にとってやっと戦争が終わったのだと佳代枝は思ったのだったが・・・。

衰弱していた政之は謙之介の勧めで、朝食後、薬効のあるという入来温泉に通い始めたのだが、それは二週間も続いただろうか。気候が夏に向かっていたこともあって、僅か三駅三十分の乗車もきついという。やがて横になる日が多くなった。すっかり無口になって、日焼けした顔に目ばかりが大きく光っていた。やがては黄疸の症候も見えるようになった。

幼い頃の佳代枝は、机に向かう父の後ろに寝転んで黙々と童話などに読みふけていたものだった。今でも学校から帰ると佳代枝は病床の父の足元に座り、鞆から印刷され四つ折りにされただけの教科書や、藁半紙に謄写印刷されたアルファベットを取り出して、宿題をするのだった。時には淳一を呼んで将棋を指したりもした。佳代枝は会話を拒絶しているかに見える父の注意を何とか引いて、相手になってほしいと思っていたのだ。しかし、政之は子供たちを眺めて、うるさがったりはしなかったが、「どれどれ」と身を乗り出すようなことは、ついになかった。心はどこか遠いところにあるように見えた。ましてや佳代枝が聞いてみたかった戦争の話などは、一切口にすることはなかった。

精神にも多少障害を来たしていたのかもしれない。登紀子は、家事の合間や夜には、政之の背や手足を優しくさすり続けた。時折、登紀子は低い声で話しかけたが、それは戦場での悪夢が少しでも彼の心から遠のくようにと祈っての言葉のように思われた。

謙之介は医者として尽くせることは精一杯やったのだが、ついに快方に向かわせることは出来なかった。多分すい臓の癌だったと思われたが、当時としては処置のしようがなかった。そしてとうとう最期の日を迎えたのだ。

佳代枝にとって父は理想の男性であった。祖父母も母も、政之を理想の子

や夫として子供たちに語ってきたことが、佳代枝の幼児の記憶とあいまって彼女の中に、ある偶像を作成していたのだった。それは戦後の無気力だった父とは全く違っていた。病気とは言え佳代枝には、もっと自分の話を聞いてくれて、自分を理解してほしいのにという残念な思いが消えなかった。

「私はお父さんのように、こんなに本をよんでいるのよ」

と言いたかった。結果、現実の父と理想の父は重なりあうことなく佳代枝の中に別人のように存在していた。理想の父との対話はずっと続くのだった。

戦前の在京中の父の机の上には、横光利一や石川達三などの単行本や文芸雑誌などが四五冊はいつもあったし、父の原稿用紙にはウオーターマンの万年筆が乗っていたものだった。屑籠の書損じの原稿用紙は、一体何のものだったろうか。

鹿児島に来てからは、蔵書の並ぶ祖父の部屋が、昼間の彼女の居場所となっていた。

祖父の部屋には濃緑の布表紙の講談全集や樺色の落語全集などが並んでいる書架があった。胸ほどの高さの本棚は専用の棚らしく、オレンジ色のクロス張りの改造社の現代日本文学全集六十三巻がきちんと収められていた。佳代枝はその本の背にある名前の中に、父の読んでいた本の著者名を見つけるのが楽しみであった。

夏休みのある日、祖父の部屋に入ると机の上に読みさしの講談全集があった。見ると「太閤一代記」で、北の庄落城前の柴田勝家と小谷の方が向かい合って座り、短冊に辞世の歌を書いている挿絵があった。読み出すと面白くて止められなくなった。

「おじいちゃん、講談全集読んでもいい？」

夕食時に佳代枝が聞いた。

「ああ、いいよ」

祖父は鷹揚に答えた。しかし登紀子は言った。

「どうでしょう。ああいったものを読んでいては頭が柔らかくなってしまわないのでしょうか」

「ねえ、お勉強もお手伝いもちゃんとするから読ませて頂戴よ」

佳代枝の熱心な頼みに母も折れた。時間を二時間以内にするという約束で。

しかしその約束は二三日で無視された。たちまち佳代枝は本の虫になった。タツは佳代枝の健康を気遣って、気がつけば本を取上げるのだった。佳代枝はタツに見つからないように納戸や押入れに隠れて読み続けた。結局、タツも佳代枝が目が悪くすることを心配して、何も言わなくなった。

講談全集は面白いばかりではなく、歴史上の人物の名前など数多く覚えられて決して無駄ではなかったと佳代枝は振り返って思う。太閤記には頼山陽の漢詩や、数々の辞世の歌などもあって、佳代枝はそれらを暗記するのも楽しみにしていた。

目ぼしいものを読み尽くすと、文学全集に手を伸ばした。初めにその中の「少年少女文学全集」を引き出した。最初の作品は、若松賤子訳のバーネット著「小公子」であった。日本での口語訳の草分けのものらしく「いいませんでした」が「いいませんでした」という表現だったが、それも夢中で読んだ。ジュール・ベルヌの「十五少年漂流記」、巖谷小波の「こがね丸」などもあったが、次第に文学作品に興味が移って夏目漱石や森鷗外などを読み耽っていたところに父が復員したのだったのだ。

学校はまだ本格的な授業は少なく、焼け跡の整理などの作業に多くの時間が費やされた。バラックの校舎を建てるための材木運びも手伝った。地面が整理された後の作業は、全員ハダシであった。通学さえもハダシで来る子もいた。勿論衣服はそれぞれ在り合わせの手縫い手編みで、みすぼらしいのが普通で、別に恥ずかしいとも思わなかった。

二年生になると、材木のバラックが教室となった。荒削りの板に四本の脚を付けたものが、二人がけの机であった。学制が変わるということで、二年生になっても下級生の入学はなかった。

ある秋の日、女学校に自由研究の部がつくられることになった。佳代枝は歴史部にしようか、文芸部にしようか迷っていた。一応文芸部希望の集まる場所に行った。後方のガラスもない窓際に立っていると、上級生二人が熱心に話し込んでいた。二人とも都会からの疎開者らしく顔立ちも身なりも垢抜けて見えた。一人の手に岩波文庫があって、それについての話のようだった。佳代枝はその本をどうしても読んでみたくなった。しばらくじっと見聞きしていた後、

「あの、その本貸してくださいませんか」

と思いついて言った。下級生の懸命な申し出に、二人は顔を見合わせて笑った。

「いいわよ。あなたにあげるわ」

その言葉は、佳代枝に上級生の品格と権威を感じさせた。最敬礼をして本を手にした佳代枝はまっしぐらに家に帰って祖父の部屋に閉じこもった。アンドレ・ジイドの「狭き門」であった。それは佳代枝にとってそれは衝撃の本であった。キリスト教の深い信仰と純粋な魂を求める、締め付けられるような息苦しさ。それは祖父の蔵書にはない初めての世界であった。しかしそれは後が続かなかった。兄や姉を持たない佳代枝は、その後も祖父の本棚の泉鏡花や幸田露伴などの文学作品に手を伸ばし、乱読と言えるほど没頭していた

三年生になった。学制が変わって、男女共学の新制高校が誕生した。佳代枝たちの学年より上の女学生は、川内中学と合併し、川内高校生として男子の中学の校舎に通うようになった。佳代枝の学年は川内高校併設中学三年という名称になって、高校にぶらさがった存在となったが、そのまま女学校のバラック校舎に取り残されていた。

新年度の登校の日、整列させられた女学生は川内高校まで歩いた。校門を入ると運動場の立ち台に向かって男子生徒が九列に整列していた。列と列の間は2メートルもあったろうか。佳代枝たち九クラスが一行づつに並ぶと、後から男子の列の間を進むように指導された。かくして男女交互の縦列となった。男子、女子の1列づつが一クラスなのだ。

昇降口から出てきた男女の二列が十番目に加わった。十列目は、新制中学の第一回卒業生で、旧制のときは入学出来なかったが、新たな入学試験をパスした人たちであった。型通りの入学式が終って、さまざまな連絡事項の説明の後、校内に入った。

教室内の席は性別に関係なく五十音順に決められて、本格的に共学の授業が始まったのだった。ジイドの本をくれた上級生は、疎開先から都会に戻ったのか、卒業したのか、いつの間にか姿を消していた。

授業の編成も一新した。必須科目と選択科目があって、時間割は自分で作

成する。教科の教室は決まっています、生徒たちは自分の時間割に従って、一時間ごとにカバンを提げて教室を渡り歩くのだった。

佳代枝の選択した国語の教師は、京都大学から学徒動員で高松の軍隊に配属されていたが、復員して教職についた原田郁夫だった。終戦直後から中学の教鞭をとっていて、型にはまらない情熱的な授業で人気があった。背が高く、やや面長で、いかにも文学青年といった感じだった。男子生徒の話では、それまで学生服を着て授業を教えていたそうだが、新学期には大きめなホームスパンの上下のスーツを着ていた。時折顔にかかる長い前髪を右手でサッとかき上げるしぐさに佳代枝は魅せられた。そして郁夫が教室に入ると空気が明るく変わるように思われた。

学徒出陣で逝った学生の手記を涙ぐみながら、読んでくれたこともあれば、昨夜見たと言ってフランス映画の話など交えて、西欧の文学や文化を紹介したりした。女学生たちはコリンヌ・リシュエールの「格子なき牢獄」「美しき争い」など見ては、感想文や作文などを競って書いて提出するのだった。「シベリア物語」や「石の花」などのソヴィエト映画のカラーも美しく印象的だった。当時の唯一の楽しみは映画しかなかったから、生徒たちの話題は自然それに集中するのだった。

教科書では、永井荷風の気だるいエッセイのあと、上田敏の海潮音のヴェルレーヌとブロウニングの詩があった。郁夫はヴェルレーヌの詩を抑揚をつけて二回読んだ。そして教科書を伏せさせて

「今の詩を誦んじることが出来る人はいるか」

と聞いた。佳代枝はさっと手を揚げた。そしてよどみなく暗誦した。

秋の日の  
ヴィオロンの  
ためいきの  
身にしみて  
ひたぶるに  
うら悲し

鐘のおとに  
胸ふたぎ  
色かえて  
涙ぐむ  
過ぎし日の  
おもいでや

げにわれは  
うらぶれて  
ここかしこ  
さだめなく  
とび散らふ  
落ち葉かな

翌年、憧れの原田先生は鹿児島市内に新たに出来た私立の高校に転出した。新学期の登校時まで知らなかった佳代枝は、何か学校が急に色あせて、気の

抜けたような感じになった。この年は朝鮮動乱が勃発し、また世界もや硝煙の臭いが漂うのだが、日本の社会は徐々に落ち着いて、物資も出回るようになり、授業も平常に行なわれるようになっていた。

やがて三年生も二学期となった。卒業後の進路を決めねばならない頃となった。

佳代枝は、男女に開かれた新制大学でも女子大でも進学したいという気持ちがあった訳ではない。しかし口も手もよく働いて家事全般をきりもりしていたタツが腰を痛み、夏頃には立居が不自由になっていた。必然的に祖父の医療事務を手伝っていた登紀子に、家事の全てがのしかかっていた。

それまでタツは、朝六時に汽車に乗る佳代枝のために、四時には起きてカマドでご飯を炊いた。登紀子がお弁当を作り、佳代枝は五時過ぎに朝食を食べ、登校するという毎日だった。タツに代わって登紀子のご飯を炊くために四時起きをして、三度の食事の支度、掃除、洗濯、医療事務などを休む暇もなくこなせばならなくなった。その労働量は都会育ちで虚弱な彼女には無理なことを佳代枝は分かっていた。

看護婦を一人増やしたが、それは家事が減るわけではない。佳代枝も夕食を手伝い、片付けを担当するようになった。それまで当然のように自由に読書に耽ったり、映画を見たりしていたのだが、陰の苦勞に気がつく、自分は母を置いては外には出られないことを覚ったのだった。

「おじいちゃん。佳代枝はお母さんの手伝いをするから、進学しないわ。でも本を読む時間はたっぷり頂戴ね。私は学校に行かなくてもお父さんの夢を果たしてみせるから。ホラ芥川賞をもらうって夢よ」佳代枝は、自分が本当に作家志望なのだとは思っていなかったが、祖父が進学しない佳代枝を氣遣うことのないように、カラ元気を見せた。タツがとても喜んだ。都会育ちでガス・水道での生活だった登紀子は、薪・井戸の家事が苦手で、タツは自分でやる方が早いとさっさとやって来た。いざ動けなくなってみると、つい小言が出てしまう。

登紀子は、大正デモクラシー時代に生まれ、その母が女性も資格が必要だと、薬剤師の専門学校を出してくれていた。その自分の経験からも学歴や資格の大切なことを十分認識していて、佳代枝の決断に賛成ではなかった。しかし少々後ろめたい気分ではあったものの、現実には助かることなので、やはり嬉しく感謝の思いで受け止めたのだった。

佳代枝は、学校の成績やテストの順位などから解放され、欲しい本もある程度は買える小遣いもあったので、古本屋で、新潮社の世界文学全集を一冊づつ買いたしていった。

レ・ミゼラブルの三巻は、枝葉の部分までの詳細な記述に辟易しながらも、最後のジャンバルジャンの死の場面まで来ると何度読んでも涙が出て、そのページを濡らした。佳代枝はそれを記念のしみとして、何回ものままにしておいた。メーテルリンクのモンナ・ヴァンナなどは、鏡の前でこっそり自分で演じてみたりした。

やがて三笠書房から粗末な紙だが翻訳本が、次々と出版されるようになった。ツイクのマリーアントアネット、トルストイのアンナ・カレニーナ、クロイツェル・ソナタなど片端から買った。活字ばかりがぎっしりと詰まっ

る傑作」ドストエフスキーの「罪と罰」「カラマーゾフの兄弟」など買い足して、佳代枝の本棚も多彩になっていた。

デユマ、小デユマなどのストーリーの展開の面白いものの中に、島崎藤村の「夜明け前」や「桜の実の熟する頃」などにも齧りついた。

進学組とは段々に疎遠になっていった。しかし佳代枝はもともと独立志向のタイプで、集団行動に組することも殆どなかったから、格別淋しいと思うことはなかった。内心のプライドは高く受けるなら東京の一流の大学だと思っていて、地元の大学に進学するという意志は全くなかった。

謙之介は孫の淳一には期待をかけていた。文学を志して東京に飛び出して行った一人息子は、戦争のため文学に挫折したばかりでなく、殆ど無言で逝ってしまった。淳一には是非とも医大を受けて後を継いでほしいと願った。彼は、淳一の成績を気にして、初期の英語など教えたり、宿題のチェックなどをした。幸い淳一は佳代枝のように本の虫ではなかった。新制中学は地元で創設されていたので、近所の腕白どもと日暮れまで遊び呆けてはいたのだが、祖父の後押しもあって、学業の成績は抜群であった。謙之介は来客に孫の自慢をいかにも嬉しそうにしていた。

淳一は姉の後輩になることなく、鹿児島市に新設された私立の高校を受験して、入学後は寮生活に入った。佳代枝は、淳一は間違いなく東京の医科大学に進学するだろうと思っていた。

卒業すると、佳代枝は母に代わって受付の窓口で座った。初診者のカード作り、カルテの整理など担当したが、薬品の調合は母が行なった。佳代枝もいずれ自分も薬剤師の資格をとろうと思った。複雑な診療報酬の計算も、祖父と看護婦を手伝って覚えた。戦後の貧しさから診療費も一時に払えない人もあれば、役所からの保険料さえ遅れることもあって、様々な対応のうちにあっという間に一年が過ぎた。

淳一は休みになると、抱えきれないほどの宿題とともに帰って来た。帰る度に、何か大人びた感じになって行く。佳代枝の読書を小馬鹿にしたような目で見ると、特に佳代枝の英語は発音がまずいという。彼女には数学の問題自体すら理解できない。そしてこうした受験勉強をして来るであろう一流大学の学生には太刀打ち出来なかったろうと思った。

淳一の二年生の夏休みも過ぎ、九月も下旬に入ったある土曜日の午後、玄関に若い男性の音がした。土曜の午後は休診だったので、奥にいた佳代枝が出た。驚いたことに麦藁帽子を手に原田郁夫が立っていた。

「やあ、しばらく。今夜、川高の教え子から誘いを受けて一杯やるんだが、宮之城線には乗ったことが無かったんで、思いついて早く出て来たんだ。淳一君の家庭訪問も兼ねてね。突然でお邪魔じゃなかったかな」

「いえ、よくいらっしやいました」

佳代枝は慌てて母を呼んだ。

「まあ、淳一の担任の原田先生が・・・」

そういえば淳一が担任はもと川高の先生だと言っていたが原田郁夫とは気付かなかった。

客間に通されて座ると、謙之介も出てきた。

母が到来の梨を剥いてみんなに供した。

「いや、世の中は狭いですね。佳代枝さんが淳一君の姉さんだったというのには驚きました。佳代枝さんは一年教えただけでしたが、実に優秀で読書量

が抜群でした。同姓なんで淳一君に聞いたら、それは姉だというので、急にお会いしたくなって出てきたのです」

郁夫は悪びれずに話した。

「この子の父が文学志望でしてね。もう亡くなりましたが」

謙之介も好意的に答えていた。

「それで蔵書も多くお持ちで」

「ああ、あの子の物は土蔵に入れたままです。いずれ佳代枝が整理する日も来るでしょう」

郁夫は風呂敷包みを開いて、一冊の本を取り出した。

「これは戦後出版され直した本ですが、読み応えがありますよ。作者は亡くなれましたが……。これは佳代枝さんに差し上げます」

それは杉山英樹著の「バルザックの世界」だった。

しばらく今後の教育の話や、淳一の進学についての相談など語り合っていたが、やや陽も傾いたかと思われる頃、謙之介が

「宮之城を案内してあげなさい」

と言った。

佳代枝は、急いで薄い紺染めの紫陽花の柄の浴衣に着替え、団扇を片手にこま下駄に足を通して外に出た。あまり人通りの多いところへは行きたくなかった。佳代枝は町中とは反対に川内川べりを川上に向かって歩いた。

「僕は君の鏡花の作品の感想文が面白かったなあ。あのミリヤアドに対する日本人の狭量さが、世界に爪はじきされる元凶だなんだっていうのは、他の子にはない視点だった」

それは鏡花自身を彷彿させる美少年に思いをよせる年上の二人の美女、秀とミリヤアド。その間で揺れる少年。そしてミリヤアドの死の間際に妄念を断ち切ることを誓う「誓いの巻」で終る鏡花初期の作品だった。物語の文学性について論じた訳ではなく、ただ異郷で薄情な日本人に悩まされて病に至るミリヤアドに憤慨を覚えたのだった。

「子規の日記にも、猫をいたぶる子供の声が出てくるけれど、そういった残酷な性格が日本人にはあるんだと思うんです。西洋の雀は決して逃げないそうですね」

川はゆるやかに左にカーヴして俄かに波音が騒がしくなった。川幅が広がって大きな石の塊がごろごろ散在して、真っ白なしぶきが飛び散っていた。川底が大きな岩盤なのだ。岩に当たって砕ける波の轟音がすさまじい。

「ここが轟の瀬（とどろのせ）と呼ばれる名所です。岩盤で流れが浅く舟が通れなかったのを、難工事の末、切り開いて舟路を作ったんですよ」

一番見通しのよい草むらの石にそれぞれ腰を下ろした。

「伊佐のお米をこの下の役所に運ぶためだったようです」

佳代枝はそこで一息入れた。そして思い切ったように言った。

「ここを訪れた与謝野晶子の歌があるのです。

船一つ轟の瀬をば流れ出づ

生命をかけて恋するごとく」

佳代枝は、真っ赤になっていた。今まで百人首の歌以外に恋という言葉を口にすることはなかった。一呼吸おいて郁夫が言った。

「いい歌だね。晶子はこうした奔流にわが思いを重ねて表現する。まさに情熱の人だ」

しばらく二人は無言で景色を眺めた。頭上には鯖雲が東から西に流れるように連なっていた。対岸の上には五六本の大きな楠の木立が並び、その木の陰に雲を朱に染め、眩しい光を放って太陽が沈もうとしているのが透かして見えた。

上流から二~三十羽もの白鷺が大きな弧を描くようにゆっくりと羽ばたいて舞い降り、対岸辺りのこんもりした闊葉樹に三々五々白い花のように止まった。その辺りは深い淵で、水面に木々が深い翳を投げかけていた。それも徐々に暗くなってきた。

「六時半の汽車に乗りたいたが」

はじけたように佳代枝が立ち上がった。まだ十分間に合うと佳代枝は思ったが、人目を避けるように急ぎ足で駅に向かった。この胸のときめきを誰かに見破られることを恐れたのだった。

三日ほどして、郁夫からお礼の葉書が届いた。「夕暮れの素晴らしい景色に、久しぶりに感動しました」とあった。

佳代枝は郁夫に対する思いで胸がいっぱいといった状態になっていた。これまで自分は郁夫ファンのワンノブゼムに過ぎないと思っていた。それが自分の作文も覚えていてくれて、その上本まで持参してきたということで、一気に火が着いた。

佳代枝はその「バルザックの世界」を丹念に読んだ。何度も出てくるファナチックという語を知らなかったので、英和辞典で引いて狂信的という意味だと納得した。不明な語を辞書で調べたのは初めてだった。それまでは感覚的に理解すればそれでこと足れりとして読み飛ばしていたのだ。

「本格的な文芸評論を読んだのは初めてです。人間バルザックの巨大なキャパシティに驚きました……」

佳代枝は丁寧にお礼状を書いた。そして

「宮之城にはまだまだお見せしたい所が沢山ありますから、お正月には是非来て下さい」

と付け加えた。

川内の本屋でバルザックを買い集め、読みふけた。つられてスタンダードも読んだ。

文豪とはこんなに豊かな創造力の持ち主を云うのだと思った。

佳代枝の心の対話の相手は、父から郁夫に代わった。そして郁夫の授業のはしはしを思い出してみるのだった。あるとき何のはずみか郁夫が

「円周率を三十一桁の覚え方を教えよう。サンイシイコクニムコフ、サンゴヤクナク、サンブミヤシロニ、ムシサンサンヤミニナクと覚えればいいんだ」と言った。佳代枝はとっさに

「鷗外の『雁』の中に八桁以下は不必要という言葉がありましたけど」と言った。そしてそんなことを言ってしまった自分に嫌気がさしたて、ずっと下を向いていた。しかしその間に彼女はそれを暗記していた。またあるとき、

「一銭以下を厘、毛と言うが、その下を知っているか」

佳代枝が答えた。

「絲、忽(こつ)です」

その時の郁夫の驚くような表情も忘れていない。何のことはない、小学生の頃に読んだ露伴のきてれつな作品「術競べ」の中に三十三円三十三銭三厘三毛三絲三忽という語があったのを覚えていただけだ。

誰も答えられない質問に答えたときの快感を佳代枝は忘れなかった。とはいえ佳代枝は日常の生活面で大いに間の抜けている点があって、隙のない伶俐な秀才ではなかったのも、クラスの人たちに疎まれることはなかった。

本の陰であくびをしたことがあった。目ざとく郁夫が見つけて言った。

「今、あくびをした人。次のページを読みなさい」

佳代枝は、自分のあくびが見つかったとは思わなかったのも、知らぬ顔をして、済ましていた。

「この列の人だ」

まだ知らぬ顔をしていた。

「後の方に座っている」

観念した佳代枝が立って読み始めた。教室中が爆笑の渦と化した。

自分は郁夫の目にどう映っていたのだろうか。郁夫になったつもりで、佳代枝はいろんな場面を思い出していた。そして郁夫に会って確かめたい、会いたいと焦燥にも似た気持になって来るのだった。

冬休みになった。相変わらず淳一が宿題の山を抱えて帰って来た。付属の中学からの生徒との学力に差があって、追いつくのが大変なのだと愚痴っていたが、そのくせ中学時代の友達と会うのだと言って出かけることが多かった。

正月になった。郁夫からの年賀状が登紀子宛と佳代枝宛の二通届いた。佳代枝の賀状には「四日に鹿児島で映画でも見ませんか。そのうち電話します。」と追伸があった。佳代枝は躍り上がりたい気持を必死に抑え、葉書を淳一に見つからぬよう仕舞った。まだ電話は個人の家庭まで普及していなかった。濱崎医院には電話はあったが、郁夫は多分公衆電話から掛けるのだろう。

二日の昼に電話があった。登紀子が出た。新年の挨拶の後、郁夫は登紀子に佳代枝と会う許しを乞うた。登紀子は別に依存がなかったのも、「まあ、それでは宜しくお願いします」と答えると、佳代枝を呼んで、受話器を佳代枝に渡した。

「お母さんに OK もらいました。十時半に鹿児島駅着のバスがあるが、来れますか」

「はい、大丈夫です」

佳代枝は上ずった声で答えた。鹿児島市までは滅多に出たことのない佳代枝のために、終点の鹿児島駅の待合室で落ち合うことに決めた。

四日の朝、佳代枝は赤紫地に濃紺の細い縞の入った銘仙の着物に朱色の花柄の紗の羽織を着て、母のクリーム色の毛糸のショールを羽織った。髪は三つ編みのお下げにして、白足袋に正月用に買ってもらった臘脂の別珍の鼻緒の桐下駄を履いた。

鹿児島行のバスは全て宮之城始発である。朝一番は七時二〇分で、停留所に早めに出かけた。北風が襟元に寒い日だった。バスは既にドアを開けてあって、五六人が乗っていて、

風が当たらないようにコの字型の座席の入口側に並んでいた。佳代枝もその奥に座った。車体は古ぼけたボンネットだった。出発の時には殆ど満席になった。山道をコトコト下り、途中で客を拾う。入来町では立っている客も十

人ほどに増えた。入来峠の頂上付近の茶屋の前で止まった。

[五分休憩します]

運転手が言った。トイレ休憩も兼ねたバスの休憩時間でもあった。右手の峠頂上に立つと、眼前には眺望が開け桜島も見下ろせた。佳代枝は、平野國臣の

わが胸の燃ゆる思いに比ぶれば煙は薄し桜島山」

の歌はここからの眺望で出来た歌ではないかと思った。

バスは下りのブレーキテストの後、また乗客を乗せて出発した。

鹿児島駅の待合室の前に立つと、薄暗い奥のベンチに座っていた郁夫が手をあげて、立ち上がった。見慣れたホームスパンの上下に黒いマフラーを巻いていた。

「やあ、お正月おめでとう。ここまでは大変だったろう。川内ではどうも人目が気になるのでね」

「おめでとうございます。先生からお誘い頂くなんて、夢みたいで、何はおいても出て来ました。母が宜しく申しておりました」

佳代枝はにこやかに挨拶した。今日郁夫に会うことは淳一には一切話していない。

二人は天文館に向かって歩き始めた。どんよりした冬曇りだったが、風がなく寒さを感じさせなかった。佳代枝は郁夫の半歩後を、小刻みに駒音たてながら付いて行った。男女が肩を並べて歩くという習慣は、まだ日本の地方にはなかった。

天文館の建物は、まだ造作も荒く、商店の種類は少なかったが、佳代枝には人々が溢れ活気に満ちたその通りが物珍しかった。中心と思われる海産物屋の店頭には、さらし鯨が山盛りになっていたが、どうやって食べるものだろうと眺めた。

まだ午後の開演までに時間があつたので、郁夫が誘って、天文館でお汁粉を食べた。餡は薄かったが小豆も入っていて、餅の代わりに、メリケン粉の薄焼き二切れが入っていた。

建設の槌音に比べて、食べ物はまだ貧しかった。

映画館を三箇所廻ったが、結局、日本映画ではなくフランス映画ジャン・ドラノアの「しのび泣き」を見ることにした。映画館は七分ほどの入りで、二人は中央辺に座った。

物語は、ヴァイオリニストの父が娘に、彼が亡妻に与えた三個の指輪を譲る。娘は父の弟子の一人に恋していたが、彼には娘を幸福に出来ないことを見抜いた父に分かれさせられる。指輪の一つを彼に与えて。結局、三個とも彼一人に与えられる運命の物語だった。

結末は、酒におぼれて村のしがない楽師に落ちぶれてしまった彼に最後の指輪をこっそり残して、愛のない夫と車で立ち去るところで終るのだが、全編を流れる胸の痛むようなヴァイオリンの余韻が、映画館を出た二人を酔わせていた。

甲突川の岸辺の石に二人は腰を下ろした。もう三時を廻っていて、日暮れの遅い鹿児島でも、影が長くなっていた。佳代枝は登紀子が持たせてくれたおむすびと漬物の弁当籠を広げた。水筒のお茶は冷たかったが、蓋のコップに注いで郁夫に差し出した。

「ジャン・ルイ・パロウは孤独の男を演じたら抜群ですね。前に「天井桟敷

の人々」を見たんですが、あのパチストにもそう思いましたけど」

「うん、まあ女性はロマンチックが好きだからなあ」

郁夫は、無条件に叙情に流されるのには抵抗しているようだった。

「今日はとても忘れられない日となりますわ。ねえ先生。先生に憧れている人は沢山いるでしょう。時々はどなたかとご一緒に見ていらっしゃるのですか」

「いや」

いつもは軽口な彼が、低い声で佳代枝に説明口調でゆっくり話した。

「男というものはね、何とも思わぬ女性に本をあげるとか、映画に誘ったりはしないものだよ」

佳代枝はそれが郁夫の愛の告白なのかと思った。胸の鼓動が自分にも聞こえた。

「僕はね、以前から君が僕の伴侶であってほしいと思っていたんだが、学校が変わってからは縁がないものと思っていた。それが君の弟を担任したと知って、ああ、これこそ縁ではないかと思ったのだ。僕の独善でね。君の周りに縁談などはないですか」

佳代枝は首を振った。

「僕はまだ君を養うまでにはなっていないが、多少時間がかかっても待っていてほしいんだ。近々ご家族にお願いに行くつもりでいる」

「先生、本当ですか。本当に私でいいんですか。私は絶対待っています。誓います」

顔を真っ赤にして佳代枝は、郁夫を見つめて言った。弁当を片付けて木口の手提げに仕舞うと、先に立ち上がっていた郁夫が手を差し伸べた。佳代枝は躊躇することなく、その手にすがって立ち上がった。西の空は茜を帯びて建物は黒い影を落としていた。帰りのバスは十七時と決めていた。二人は並んでゆっくりと駅に向かった。佳代枝は掌に残る郁夫の手のぬくもりを消さぬように、手提げからミトン型の手袋を出してそっと手を通した。

帰宅して母にフランス映画を見た話をしたが、母はそれ以上詮索するようなことはなかった。

佳代枝は、少しは料理、掃除、洗濯などの家事を心がけねば、嫁になれないと思ってはいたが、現実には、本の魅力から抜け出せなかった。その頃はヘルマン・ヘッセに夢中だった。「ペーターカーメンチント」、「車輪の下」、「ゲルトルート」中でも小品の「クヌルプ」を愛した。週一回は、彼女が読んだものとその感想を郁夫に送った。

ある日、郁夫から小包が届いた。ロマン・ロランのジャン・クリストフ三巻であった。

佳代枝は最初、クリストフがトルストイの「幼年時代」のように佳代枝自身と同じ視線で、物を見たり感じたりいることを喜んで読み進んだが、それがいつしか感動に変わった。天才的音楽家であるクリストフの情熱に対して、というよりは、暖かく肯定的な人間観を持つ作家のロランその人に対してであった。

読み終わるとすぐに川内の本屋に行って、ロランの「魅せられたる魂」三巻を買ってきた。そしてそれもまた夢中で読んだ。主人公アンネットは真摯に生きる心大きな女性である。一般社会の慣習や常識にぶつかりながら遅しく生きる女の姿を読んで、人間に対する深いロランの愛情に胸を打たれた。

女性を見事に描いていると言われるトルストイの「戦争と平和」のナターシャは、まだまだ男性の目から見た女性である。それが、ロランのアンネットは、女性が感じる女性の心そのままに描かれているのだ。ということは、ロランは、女性を女性と見るのではなく、女性も人間として自分の延長として描いているのだと佳代枝は思った。そして真に感動出来る作家を教えてくれた郁夫に深く感謝した。

春休みになった。郁夫から登紀子にお邪魔したいという連絡があった。桜も終わりの三月下旬であった。十時着のバスということで、登紀子と佳代枝は早堀の筍の散らし寿司を作って待った。

座敷に通された郁夫は、謙之介と登紀子を前に両手をついた。

「いずれ正式に仲人を立てて参りますが、佳代枝さんを僕に下さい。お願いします」

長い前髪がはらりとたれたが、郁夫は掻き揚げなかった。謙之介も登紀子も何となく推察していたことであった。

「原田先生のご出身はどちらですか」

登紀子が尋ねた。

「人吉です。ひいじさんが薩摩と一緒に戦ってなくなったんで、小さい時から西郷さんに憧れていて、五高に入りました。京大に進んだんですが、学徒動員で召集された生き残りです。父は教員でしたが、もう九年前になくなりました。母は恩給と農業で一人暮らしでなんとかやっています。母はよく「父さんがこの敗戦を知らずに死んだことは幸せだと」言っていますが、本当にそうでした」

「それはそれは。お母上様も難儀なことでしたらう。この子は父の影響なのか、本の虫のような娘での中。主婦業がちゃんと勤まるかどうか問題じゃが、それを承知の上というなら、いいでしょう。まあ即席ながら、当分はばあさんに仕込んでもらいますかね」

謙之介は機嫌がよかった。登紀子も顔をほころばせた。

「まあ、おとうさん、この子がいなくても本当にいいんですか」

そうは言ったものの登紀子も別にあとのことを心配している訳でもなかった。そして佳代枝を促してそそくさと台所に向かった。

まだ正午には間があったが、阿久根からのカンパチの刺身や野菜の和え物、煮しめなどに、錦糸卵と木の芽を飾った散らし寿司の銘々皿が並んだ。タツと淳一も呼ばれた。

「先生がおねえちゃんをお嫁さんにするの。やだなあ。僕恥ずかしいや」話を聞いた淳一はてれた。郁夫が言った。

「いや、淳一君が卒業してからの話だよ。それまで黙っていなさい」

黒ジョカと杯が運ばれた。

「まだ昼だから、今日のところは形だけだ。いずれ飲み明かすようになるだろうよ」

謙之介は郁夫に一献勧めた。食事が終わった。まだ一時前だった。

「頂き発ちで申し訳ないですが、二人で川内に行こうと思います」

郁夫が言って立ち上がった。佳代枝はベージュのスプリングコートを羽織って外に出た。

「海を見よう。広い海を」

郁夫が言った。二人は川内で鹿児島本線の上りに乗り換えて西片で降りた。

海に沿った若草の土手をすべるようにして砂浜に下りた。空は晴れ、海は碧くきらめいていた。見はるかす東シナ海はあくまでも穏やかであった。ゆるやかなカーブを描いた砂浜の先に、木々に覆われた二つの岩島があり、大小の岩が点在していた。それらに砕け散るしぶきの白さが美しい。

「そうだ。この海だ。鹿児島湾にはこの青はない」

二人はそれぞれ適当な岩に腰をおろした。

「ねえ先生。大勢の先生のファンの中でどうして私なのかが分りませんわ」

「僕はね、僕と君の間には天才が生まれるんじゃないかと思うんだよ」

カラカラと郁夫が笑っていった。冗談めかして言うてはいたが、まんざらの冗談ではないと佳代枝は感じた。(なあんだ、もう少しロマンチックな答えが返ってくるかと思っていたのに) 佳代枝は案外打算的というか現実的なその言葉に男を感じた。それは佳代枝に不快どころか満足感を与えた。

(私は進学はしていないし、点取り虫じゃなかったから、通信簿の点数は優等生ではなかったけど、先生は私の本質を見てくださっている)

「ええ、そうですね。きっとバルザックやスタンダールが生まれますね」

なぜかロマン・ロランとは思わなかった。やはり彼女にとってロランは別格の存在だった。

「そうだ。維新を成功させて日本を動かして来た鹿児島だからね、桁はずれな大きい作家が生まれる筈だ。君のお父さんもそれを願っていたんじゃないかな」

(そうだわ。ここ川内は有島三兄弟の出身地なのだし、今でも時折引っ張り出して読んでいる愛読書「現代日本文学全集」の発行元、改造社は川内出身の山本実彦の創立なんだもの。十分文豪の育つ素地のあるところだわ)

二人の会話は、有島武雄や里見弴の作品評や、「現代日本文学全集」についてになった。佳代枝はそれまで自分は批評家の目で作品を読んでいた訳ではなく、ただの乱読にすぎなかったのだと知った。

「現代日本文学全集の功績はすごいものだと思いますわ。私は作家の名前を聞いただけで、その作品が二三編は思い浮かびます。何と言っても、あの総ルビのついた編集は子供にも読めるんですから」

内容はともかく、一応郁夫との対話を続けることが出来ることに、改めて佳代枝は祖父がそれを買って揃えておいてくれたことの恩恵を思った。無言の時間が長く続いたが、二人はそれぞれの思いに耽っていて、かえって言葉は要らなかった。

空の碧が青ざめたように薄れ、やがて茜色に染まり始めた。輝きを止めた濃朱の太陽が水平線に近づくにつれて、一面の金波が水面をさざめきながら、寄せてくるのだった。

「東シナ海の日没は素晴らしいね。こんなに長くこの海を眺めていたのは初めてだ。僕にはあの先に散って行った友が何人もいる」

郁夫は立ち上がってズボンの砂を払った。砂浜から道によじのぼるとき、佳代枝はまた彼の手にすがったが、道に上がると自然に手が離れた。郁夫はすたすたと無人駅に向かう。何か期待はずれのような思いで佳代枝は後を追った。

列車内では向かい合わせでなく、窓際に座った佳代枝に、寄り添うように郁夫が座った。

佳代枝は、顔と視線は窓外に向けていたが、全身の神経は左隣に座った郁夫

の感触に集中していた。コートの上からとはいえ、異性と密接に触れ合って座ったことのなかった彼女は息をひそめて、じっとしていた。郁夫は目をひざの上に落としていた。右腕を肩にまわしてもいいだろうか。いっそ抱きしめたいなどと内心思った、がそぶりには出さなかった。

無常にも列車は薩摩高城、草道、上川内と過ぎ次は川内である。佳代枝は宮之城線に乗り換えねばならない。身住まいを正して佳代枝は言った。

「学校が始まるとお忙しいでしょうね。次は私がそちらに参りますわ」

「それがいいなあ。天皇誕生日の頃に待ってるよ」

立ち上がった佳代枝に郁夫は握手を求めた。佳代枝は列車がホームに滑り込んで、ぐらりと揺れるまで、郁夫の手を放さなかった。周囲の目など眼中になかった。佳代枝の真直ぐな視線を郁夫はゆったりと笑みをもって受け止めていた。

一ヶ月が経った。佳代枝は登紀子の巻寿司と稲荷寿司の重箱を風呂敷に包み、バスで鹿児島島に向かった。西鹿児島駅で待ち合わせ、市電に乗った。郁夫が自分の下宿先に案内すると言ったからだ。

コトコトと西へ三十分ほど行ったところで電車を降りた。もう市街地はとうに過ぎて、左に錦江湾に浮かぶというより聳え立つ桜島があった。右手の岡に古い民家が点在していた。郁夫は、くの字の細い道をゆっくり登って、百メートルほどの所にある一つ葉の生垣のある家に入った。そこが彼の下宿先であった。

玄関で、家主夫婦に声を掛けて、二人は二階に上がった。南向きの二間続きで、東側の八畳が郁夫の部屋で、隣は空き部屋であった。

郁夫が障子を開け放つと手すりのある廊下になっていて、眼下に松並木があり、正面は錦江湾の海で桜島が迫っていた。部屋はきちんと整理されていた。東の壁には粗末だが大きい本棚があり、北欧の文学書に混じってスピノザやショーペンハウエルなどの哲学書が目に入った。佳代枝は郁夫の世界にはとても追いつけないのではという不安が湧いた。

「先生、私にはとても読めそうもない本ばかりですね」

「なに、今まで目の前になかったというだけのことだよ。その気になれば、読めないことはないさ。しかし人はそれぞれなんだから、何も無理して同じものを読む必要はないよ」

それでも負けん気の佳代枝は、きっと読んでみせると自分に言い聞かせていた。

昼食の時間だった。郁夫は佳代枝の広げた重箱の中の巻寿司と稲荷寿司のいくらかを、大家のために中敷の筍の皮に取って下に降りた。そして代わりにお茶と取り皿を持って上がって来た。

春風が磯の香りを運んで来るように思えた。二人は登紀子の味を味わった。

米はまだ統制下にあった。パンや蕎麦などは店に出回っていたが、米飯のものは外食券という配給分を券に換えたものがないとヤミということになり違反であった。

「どうもこのところ調子が悪いんだ。疲れやすいし、微熱がでる。胸をやられたか、レントゲンを撮ってもらおうつもりだ」

「まあそれはいけないわ。でもこの頃はストレプトマイシンっていう薬が出て、そんなに恐れることはないって話ですけど」

「そうだね。栄養も取れるようになったし」

郁夫は話題を変えた。

「今いる学校は進学校として名を出すために、子供に大変な詰め込みを強いているんだ。僕自身は、もっと情緒面を大切にしたいって思うから、単語を覚えるよりも本を読ませたい。「三太郎の日記」なんか読める子がいなくなるのではと思うと淋しい。いろいろ考えることが多いんだ」

佳代枝は「三太郎の日記」は読んでいなかったが何故か食指は動かなかった。

本棚の下段にはロシア文学全集も並んでいて、ショーロホフの「静かなドン」三冊が目をついた。「あれは貸してもらおう」と佳代枝は思った。

「僕の中学生の頃はね、読めていたかどうか分からないが、こんな分厚い原書を持ち出してね、辞書を片手に半日、図書館で一ページページめくっている子や、天体望遠鏡を持ち出して、毎日何回か太陽の黒点を調べているような子がいたんだよ。授業を全然無視しろとは言わないが、成績にこだわらない、何かに熱中する、そういった子の方が大物になるんじゃないかと思う」

佳代枝は自分もかつて成績には特にこだわっていなかったので強く頷いた。机の上の目覚まし時計が三時を回った。

「これは、最近の力作だよ。戦争前夜のフランスの社会や思想がよくわかる」

郁夫は前もって用意しておいたらしい本の包みを佳代枝に手渡した。マルタン・デュガールの『チボー家の人々』十三巻だった。

男の部屋に一人いるということに落ち着かず、緊張していたが、いざ帰るとなると押し倒してキスくらいしてほしいなどとチラリと思った。

帰りしなに大家の妻から、新聞紙に包んだ大羽いわしの丸干しを三本を、先ほどのお礼だと言って手渡された。五十才前後の彼女に、さほど好奇の視線で見られなかったことが、佳代枝をほっとさせた。

しばらく郁夫から連絡がなかった。ある晩珍しく淳一から電話が掛かって来た。

「原田先生が入院したって。鹿児島大学の病院らしいよ。難しい病気らしいけど、詳しいことは分からないから、明日学校に聞いてみてよ」

登紀子は驚いて佳代枝に伝えた。

「たしか微熱が出るから、レントゲン撮ってもらって言ってたけれど」

翌朝、始業時間を待ちかねて登紀子が学校に電話した。結局病名はわからなかったが、病棟と病室を教えてもらった。佳代枝はすぐさまバスに乗った。

「やあ、今日は君に手紙を書いたんだが」

ベッドに横になっていた郁夫が、てれくさそうに言った。そして目を閉じ小声で、

「どうも肺ではなかったようだ。君に話してなかったが、僕は広島に原爆が落ちた翌日、後片付けに動員されて、広島に入ったんだ。黒い雨にも多少ぬれただろうし、相当放射能は浴びたと思う。気にはしていたが、友人たちは元気にいる者も多いから、無事免れたと思ったのが甘かったかな」

佳代枝は蒼ざめて跪き郁夫の手を取った。それは冷たく汗ばんでいて、以前とは全く異なった感触だった。佳代枝は胸にぐっとせまって、涙が溢れた。そしてそれを郁夫に覺られないよう彼の手を額に当て、しばらく無言でそのままじっとしていた。

ドアが開いて、髪をひつつめに結った小柄な婦人が入って来た。手を放した佳代枝は足元の方に立った。

「母さん、今着いたの。心配かけるが、これはもう仕方がないかもしれない。

先生にお任せだね。そうだ、母さん、こちらがこの間話した濱崎佳代枝さんですよ」

「まあ、いつも郁夫がお世話になっているそうで」

頭を下げた郁夫の母の紺の着物も汗ばんでいた。人吉から列車や車を乗り継いで来たのだろう。

「お母様でいらっしゃいますか。初めまして。ふつつかものでございますが、宜しく願いいたします」

緊張して堅苦しい挨拶をして佳代枝は、明日また来ることを告げて外に出た。「これはもう仕方ないかもしれない」と言った郁夫の言葉が頭の中でリフレインしていた。

翌日、郁夫の母が佳代枝を外に呼び出して、こっそり病名を告げた。「急性骨髄性白血病」ということで、もう何日かの問題だという。彼女は佳代枝を残して買物があると外に出た。

「先生、しっかりして下さいよ。文豪の親になる約束でしょう」

頭の中が真っ白になっていた佳代枝は、大胆にも郁夫に覆いかぶさると、唇を郁夫のそれと重ねた。「何で今まで何にもしてくれなかったの」と詰め寄るように。郁夫は目を閉じていたが、やがて左手で佳代枝の頭を撫でた。佳代枝は彼の右手を取ると、ブラウスの下を持ち上げて、もどかしく乳房を握らせた。

「柔肌の熱き乳房に触れもみでさびしからずや道を説くきみ」

二人の脳裏に晶子の歌が同時に閃いたことだろう。

「ありがとう」

ややあって郁夫が言った。廊下の足音に佳代枝も身を起した。午後の検診だった。

佳代枝は連日通う訳にもいかないの、火曜日と金曜日に行くと郁夫の母に告げた。

郁夫に会っても、そっと手を乳房に持って行くか、軽いキスをする程度になった。それが三日会わないだけでもその変貌に驚くようになった。痩せて顔の骨に皮が張り付いたようになってきた。ある日郁夫の母が

「郁夫が、あなたにもう来るなど言っているの。自分の本は一切あなたにあげてくれと言ってるのよ。それで許してやってね」

と言った。佳代枝は郁夫の心情がよく分かっていたので、頷いて深々と頭を下げた。そして郁夫の母の目を盗んで最後のキスをした。郁夫を見ると目に涙が浮かんでいた。

六日後、郁夫が逝ったと知らせが入った。

葬儀は学校が中心になって、学校近くの公民館で行われた。佳代枝はただ遠くから見守っていた。十日後、重いダンボールの箱が十二個届いた。郁夫の蔵書だった。佳代枝は涙ぐみながら、運送屋にそれらを土蔵に運ばせたが、開けようとはしなかった。

いつしか四十年が経過した。謙之介もタツも登紀子も全て逝ってしまった。あれほど謙之介が待ち望んだ淳一は東京の医科大学に残り、いまだに帰って来ていない。濱崎医院は大隅から来た若い内科医に貸して、佳代枝は自分用の小さな二階屋を建てて気楽な一人住まいである。

ここ三十年、佳代枝は町の図書館に嘱託として勤務して来た。不思議なこ

とに、本に囲まれた職場では、今更という気が先立って、何も読む気を起させなくなっていた。日々膨大な本が出版され、新しい作家も輩出している。佳代枝には想像もつかないような発想や表現が溢れている。しかしあれほど読み耽っていたのが嘘のように、仕事柄の作業以外は本を手にするのが無くなった。

七十歳になって、それまで代わりがないと頼まれ、自分も生きがいのようなつもりで続けてきた勤務からも、やっと解放された。しかし五十歳台に、仕事をやめたら読むつもりで揃えて来たロマン・ロラン全集も、今では本棚から取り出すのもしんどいと思うようになった。

楽しみになってきたアメフトのテレビ観戦もスーパーボウルが終わり、プロボウルも終わった早春のある日の午後、ふと土蔵の中の本を整理しなければと思いついた。

長い鉄棒の鍵の手の先をガチャガチャとやって、扉を開けた。父政之の本は、佳代枝の勤務中に登紀子が整理して、一階の中央に背合せに置かれた本棚に納められていた。

郁夫のものはダンボールのままである。佳代枝は家具屋で父のものと同じような本棚を二個買って、父の棚と平行に置いた。

箱を開くと、多少赤く変色してはいるが、郁夫の部屋にあった本が次々と出てきた。佳代枝は記憶を便りに、かつて郁夫の部屋に在った通りに並べようと思った。はたきをかけて次々に収める。多分棚からそのままに箱詰めしたであろう。本は順よく入っていた。分厚い医学書も二冊あった。

ふと手にしたA5版の3センチほどの厚さのものには、紺地のカバーが掛けられていた。縦書きのノートのような自由形式の昭和二十九年の日記帳であった。最後の日付を見ると五月三十一日(月)とあった。そこには佳代枝への手紙、遺言が書かれていた。

佳代枝さん

恐れていたことがとうとう現実になりました。僕は明日入院します。恐らく退院の日はないでしょう。この一年近くの僕を赦して下さい。

原爆投下の翌日、僕たちの隊はあの地の整理を命令されて焦土に入りました。あの地獄の光景を目にした僕たちは、もう人間には戻れないと思ったものです。一週間ほど昼夜を分かたず働きました。焼け爛れた死体を山と積んで油をかけ焼きました。目をそむけたくなるような人間を救護所に次々と運びました。放射能などということは誰も考えてもみなかったことでした。

あとから放射能の後遺症のことを知って、いろいろ調べたり、友人たちとも連絡をとりあって情報も集めて来ました。仲間の三十人のうち二人は白血病で亡くなりました。しかしまだ大勢元気である。自分は大丈夫だろうと言いついて聞かせてきました。

僕は、心から君を愛しています。君が好きです。授業中、得意なことを聞かれたときの

キラキラしたあの目は君だけのものだ。もっと引き寄せて抱きしめたかった。いや本当に自分のものにしたかった。

僕を臆病にさせて来たのは、もしやという発症の恐れでした。それなのに、何故口をぬぐってお母上に君を下さいなどと言ったのか。それは僕の心からの希望であり願いであったからでした。赦してくださるよう深くお詫びいた

します。

君がいつか文豪の母になるか、いっそ君自身が文豪を目指すか、どうか頑張っていて、僕の

分も生きて、僕の夢も叶えて下さい。

ご家族皆様のご多幸を祈っています。

追伸

僕の蔵書は全て君に送るように母に伝えてあります。僕との対話も忘れないでほしい。

.....

佳代枝は改めて郁夫を思い浮かべた。いつか自分が甘くだらけた人間になってしまっていると思った。大半の時間をただテレビに向かって過ごしている。父や郁夫との対話なんてとうの昔に忘れていた。

そうだ。今こそ私が私でいられる自由な時間を持ったではないか。まだ十年は、何か出来るはずだ。父の夢、郁夫の夢を追うのもいいかもしれない。そうだ、この土蔵の中に電気を引こう。この蔵書の山の中で毎日二三時間過ごすことにして、何かが湧いてくるのを待とう。私たちの過ごした、あのきびしく辛かった敗戦の時代を伝えることも、今では必要ではないだろうか。それは今生きている私たちの義務と言えるだろう。

「私の本当の人生はこれからなのだ」

佳代枝は郁夫の日記をしっかりと胸に抱いてつぶやいた。見上げた空はいつしか茜色に染まっていた。